

清戸迫横穴墓群（Z 群 83 号横穴墓）における彩色壁画の発見について

遺跡の名称	清戸迫横穴墓群 Z 群 83 号横穴墓
所在地	福島県双葉郡双葉町大字新山字清戸迫 ^{きよとさく} 地内
調査主体	双葉町教育委員会
調査機関	双葉町教育委員会 東京文化財研究所保存科学研究センター 茨城大学考古学研究室
調査指導	文化庁、福島県教育委員会
調査期間	令和 6 年 12 月 13 日～継続中
調査原因	史跡清戸迫横穴保存活用計画策定に伴う分布調査
発見遺構	家形の横穴墓、彩色壁画

1. 遺跡の概要

清戸迫地内に所在する清戸迫横穴墓群は、現時点で 31 支群 304 基の横穴墓が確認されており、一まとまりを形成する横穴墓群の確認数としては東日本最大である。

特に昭和 42 年（1967）の双葉南小学校の敷地造成工事中に彩色壁画が発見された 76 号横穴墓は、翌昭和 43 年（1968）に清戸迫横穴（きよとさくおうけつ）として国史跡に指定されており、現在も東日本を代表する装飾古墳の 1 基としてよく知られている。

2. 発見経緯

双葉教育委員会では、令和 6 年度から国史跡清戸迫横穴の保存活用計画策定事業に着手している。当事業において、計画対象範囲に含めた指定地外の遺構の大半が過去に実施した分布調査から半世紀近くが経過しており、改めて現況を確認する必要性が生じた。このため、清戸迫古墳群、清戸迫横穴墓群の 2 遺跡の現況把握を兼ねた分布調査を令和 6 年（2024）12 月 11 日から実施した。この調査の過程で、13 日に 83 号横穴墓にも彩色壁画が描かれているのを発見した。

83 号横穴墓が属する Z 群は、76 号横穴墓が属する α 群から北東へ約 100m 離れて所在する。昭和 50 年代の分布調査で既に存在が明らかになっていた横穴墓であるが、これまで玄室内の確認まではされていなかった。昨年の分布調査時点で、半開口状態であったが、過去の調査記録にも半開口であったことが記録されており、記述と一致している。このため、少なくとも半世紀は半開口の状態であったと理解できる。玄室内には鉛筆が落ちていたため、開口後人的侵入はあったとみられるが、これまで壁画の存在は指摘されていない。

3. 83 号横穴墓の概要

(1) 玄室について

平面形は奥行 3.7m、幅 3.6m の方形を呈し、丸みを帯びる 76 号横穴墓よりも整形された造りである。床面から天井までの高さは 2.5m を測り、横穴墓の規模としても大規模である。清戸迫横穴墓群においても規模が明らかになっている横穴墓の中では最大である。立面形は屋根を削り出す家形であり、ドーム形の 76 号横穴墓よりも古い横穴墓の要素を持っていると考えられる。床面には約 10 cm 高いコの字状の台床が確認でき、全面に礫が敷かれている。遺物は現状では確認できない。

(2) 壁画について

奥壁を中心に左側壁、右側壁、前壁の 4 面すべてに彩色による装飾が施されている。開口していたこともあり、76 号横穴墓と比較すると彩色も薄くなり、析出物の発生で図像が認識しにくい箇所もあるが、半開口であったため全体的には良好な状態である。

壁画の共通事項として、奥壁と前壁には梁を表す直線、左右側壁には桁を表す直線が描かれ、直線中央部からも束を表すと考えられる線が天井に向かって確認できる。

奥壁の梁線上部には、中央の湾曲する束線から左側に 5 個、右に 6 個の珠文が描かれており、その配置からも星を表現している可能性がある。梁線下部には、冠帽を被る人物や騎馬人物、動物、舟や盾、大刀等の器財、珠文等が豊富に描かれている。

共 通：梁・桁・束・軒（一部）の家表現

奥 壁：人物 4、騎馬人物、動物（シカか）、動物（イノシシか）、靱、舟 2、靱、大刀、盾 2、梁線上部に珠文複数、梁線下部に珠文多数、その他

左側壁：家表現のほか珠文複数

右側壁：家表現のほか奥壁との接界部付近に珠文複数

前 壁：家表現のほか玄門上部に珠文複数

(3) 76 号横穴墓との比較

玄室は 76 号横穴墓がドーム形であるのに対し、83 号横穴墓は家形の大規模な造りであるという特徴がある。図像についても、人物や動物を主体とする点では 76 号横穴墓と共通しているが、珠文を広範囲に描き、器財も壁画の主体として描き、彩色で家表現する点は 76 号横穴墓とは異なる。また、福島県域の装飾古墳の特徴である渦巻文も確認できず、両横穴墓には死生観の違いがあったことが読み取れる。しかし、奥壁左端に描かれたイノシシらしき図像は 76 号横穴墓と壁画の配置的にも類似しており、両横穴墓の造営主体に関係性があった可能性が考えられる。

玄室構造、壁画の内容から造営には時期差が想定されるものの、両横穴墓には共通点

も見い出せることから 83 号横穴墓は清戸迫横穴墓群において 76 号横穴墓に先行する装飾横穴墓の可能性が高く、76 号横穴墓の造営を考えるうえでも極めて重要な横穴墓である。

	奥 行	幅	高 さ	玄 室
76 号横穴墓	3.15m	2.84m	1.56m	ドーム形
83 号横穴墓	3.7m	3.6m	2.5m	家形

玄室の比較

(4) 83 号横穴墓に係る調査等経過

時 期	調査者等	概 要
令和 6 年 12 月 13 日	双葉町教育委員会	壁画発見
12 月 17 日	玉川一郎（福島県考古学会顧問）	状況調査
12 月 19 日	福島県教育委員会文化財課	状況調査
令和 7 年 1 月 7 日	朽津信明（東京文化財研究所修復計画研究室長）、 芳賀文絵（東京文化財研究所研究員）	状況調査
1 月 15 日	文化庁とのオンライン協議	状況報告
3 月 14 日	田中裕（茨城大学教授）	状況調査
3 月 14 日	東京文化財研究所	状況調査
5 月 2 日～4 日	茨城大学、双葉町教育委員会	実測調査
6 月 12 日	菊地芳朗（福島大学教授）	状況調査
6 月 27 日	藤澤敦（東北大学総合学術博物館教授）、 鹿納晴尚（東北大学総合学術博物館技術職員）	状況調査
7 月 25 日	鈴木功（白河市文化財課文化財専門研究員）	状況調査
7 月 29 日	東京文化財研究所	状況調査
8 月 28 日	辻秀人（東北学院大学教授）	状況調査
9 月 30 日	田中裕、双葉町教育委員会	実測補足調査
11 月 11 日	東京文化財研究所	状況調査
12 月 4 日	文化庁、清戸迫横穴保存活用計画策定委員会	状況調査

4. 遺跡の評価

(1) 横穴墓の年代について

東北・関東における横穴墓は一般的に、大きい規模のものに古い例が多く、本例は、6 世紀末ごろの副葬品を有する福島県いわき市中田 1 号横穴墓に匹敵する規模の玄室（中田 1 号墓の場合は後室）を有し、冠金具を出土した最大規模の茨城県日立市赤羽 B 支群 1 号墓などに次ぐ大きさである。また、宝形造の家形ドーム状をなす玄室である

点も、この地域の横穴墓として古い要素とされる。出土遺物がなく、横穴墓の規模、形状からの推測となるが、装飾の内容を含め、6世紀後葉から7世紀前半の間に造営されたと考えられる。(田中裕)

(2) 東日本の装飾古墳における学術的価値

本例は、玄室の家形ドーム状形状に家の構造材が表現され、珠文とともに人物・馬形・鹿形が描かれている点で、東北地方の既知の装飾横穴墓(清戸迫76号墓、福島県南相馬市羽山横穴墓、泉崎村泉崎横穴墓など)に連なる例といえる。一方、関東の装飾古墳・横穴墓に多い靫形、大刀形、盾形、軛形、舟形などの器財形意匠も描いていることから(茨城県ひたちなか市虎塚古墳、桜川市花園3号墳など)、考古学的に関東と東北をつなぐ事例として注目される。装飾古墳の図像は基本的に九州の装飾古墳・横穴墓に源流が求められるため、古墳時代後期から終末期におけるダイナミックな地域交流を表す貴重な資料である。

これまでの事例から、幾何学文様や家構造の表現であれば同じ群内に複数あることもあるが(宮城県大崎市山畑横穴墓群)、人物や器財などの具象画を彩色表現した横穴墓は極めて限定的であると思われていた。今回、清戸迫横穴墓群で2基目が確認されたことは東日本で初めての事例とみられ、横穴墓群の形成要因やその性格について再考を促す発見といえる。(田中裕)

(3) 容易に認知可能な彩色壁画発見の価値

一つの横穴墓群内で、彩色壁画が現時点で容易に認知可能な状態にある横穴墓が複数確認される点には、希少性が指摘できる。

こうした事例は、国指定史跡・石貫ナギノ横穴群(熊本県玉名市)、日立市指定史跡・十王前横穴墓群など九州地方や東日本でも確認でき、唯一無二というわけではない。

ただし、福島県内の国指定史跡である泉崎横穴、中田横穴、羽山横穴も群を形成するうちの1基であるが、いずれも彩色壁画は1基のみしか確認されていない。このため、清戸迫横穴墓群での二例目の発見は、県内国史跡の装飾横穴墓が群内で1基という中において、複数確認できる事例としては初めてと位置付けられる。

古墳時代に造り出された造形と我々が現在目にできる姿とは一対一対応ではなく、県内でも過去の調査記録では彩色壁画を持つ横穴墓が複数基報告されている例も他にあるが、現状ではその認知は容易ではない。

以上から、横穴墓群内で2基目の彩色壁画が発見されたという客観的事実に加え、それが2基とも肉眼で容易に認知可能な保存状態にある点に価値があると考えられる。

(朽津信明)

(4) 壁画の保存状態について

主として壁画が描かれて以降現在に至るまでの間に析出してきた塩類などによって、一部表面が覆われて認知しづらい部分があるが、その大半は壁画が既に失われたわけではなく残存していると考えられる。現在の環境がこのまま継続する限りは急速に劣化が進行する可能性は低いと思われるものの、十分な配慮が望まれる。

横穴墓内には人間の遺体が火葬されることなく収められて密閉されたと考えられることから、恐らく殆どの古墳時代の横穴墓内ではカビの大繁殖が起きたことが推測される。にもかかわらず76号墓をはじめ、閉塞環境のままで発見に至った事例ではそのような状況が認められないのは、古墳時代に閉塞された環境が壁画の保存には有効に機能することを示唆している。

83号横穴墓は残念ながら76号横穴墓の発見時とは異なり、短く見積もっても50年以上は開口していたと考えられることが、76号横穴墓との保存状態の違いの主要因と思われる。しかし、それでも入り口の手前が埋まり、半密閉状況が継続してきたことが壁画の保存に寄与してきた可能性がある。

現在の環境が保たれる限りは、83号横穴墓の壁画が急速に劣化する可能性は高くはないと予想されるものの、76号横穴墓は先人たちの尽力で開口以後50年以上にわたって保存が図られてきたことに学び、83号でも慎重な環境管理が望まれる。(朽津信明)

5. まとめ（報道発表の要点）

- (1) 清戸迫横穴墓群においては2基目の彩色壁画を持つ装飾横穴墓である。
- (2) 国史跡である76号横穴墓よりも古い装飾横穴墓の可能性が高い。
- (3) 関東と東北の装飾古墳にみられる図像が両方とも一緒に描かれているという特徴も認められ、東北と関東をつなぐ壁画の内容といえる。
- (4) 人物や武器・武具などの具象画を彩色で描く装飾古墳が、同じ群のなかで2基以上あることが確認できたのは、東日本では初の事例である。
- (5) 全国的にみても、容易に認知可能な彩色壁画が群中に複数基確認できる事例として希少である。
- (6) 現在の環境が維持される限りは急速に劣化する可能性は高くはないと考えられる。

6. 今後の予定

次年度からは追加指定に向けた調査指導委員会の設置を予定しており、その中でも中心となる遺構として、今後の調査方法や保存対策等を検討していく。町内でも遺跡の価値を共有できる場を設けていきたい。また、学会での報告も検討したい。